僕は雇われずに生きていこうと思った

ネットで1億円稼いで自由になった元皿洗いの軌跡

ネット時代の新しい生き方

パチンコ狂いの両親、 膨大な家の借金、
時給 700 円の皿洗いの日々…
藁にもすがる思いで飛び込んだネットビジネスの世界で、
半年後にまさかの月収100万超え。
就職する必要もなくなり、
20代にして自由な日々に突入中。

濱田大輔

はじめに

初めて東京の満員電車に遭遇したときの衝撃は今でも忘れない。

当時僕は大学生。

ゼミではるばる鳥取から東京に合宿に来た。

夏の暑い季節だった。

白いシャツや黒いスーツに身を包んだ中年男性たちが、体をぎゅうぎゅう密着させながら、苦しそうなそうな顔で押し合いへし合いしていた。

饐えた体臭が充満していた。

車内は空調が効いていたはずだが、多くの人が額に汗をかき、シャツの脇や背中に大きな染みをつくっていた。

正直立っているだけでも激しく消耗したが、このサラリーマンたちはこれから会社で丸一日忙しく働いて、また帰りにこんな電車に乗るのだから、みんな超人だなと思った。

僕はやたらと体を押し付けてくる目の前のおじさんの禿げかかった頭皮に浮かぶ汗に触れないよう気を付けながら、将来自分もこんな風に黒いスーツに身を包んで、毎日早起きして、死んだ魚の目をしながら会社に通う人生を送るのかもしれないと漠然と思っていた。

将来小説家になりたかった僕にとって、それはひどく憂鬱な未来だった。

約40年、僕が白髪になるまで連綿と続く通勤と労働の日々。

僕はよく自由な人生を夢想した。

もし宝くじが当たったらどうしよう、などと考えたり話したりするのが好きだった。

家が極貧で、学費や借金を払うために毎日深夜までアルバイトをしていたので、ことさら自由に憧れていたのかもしれない。

お金は口座に使い切れないほどあるので、欲しいものはなんでもすぐに買える。

毎日が休日なので、時計もカレンダーも必要ない。
どこに住んで、どんなライフスタイルを送ってもいい。
お金なんか気にせずに夢を追う活動や趣味に没頭してもいいし、一箇所に留まらずふらふらと旅行し続けてもいいし、都心のタワーマンションに住んでセレブな生活を楽しんでもいいし、南の島に移住して毎日サーフィンしていてもいい。
お金も、時間も、場所も、すべてが自分の思い通りになる状態。
自分の人生を自分の思い通りにデザインできる自由。

それから約５年が経ち、現在僕は住みたかった東京に移住して、実際に今述べたような自由な生活を送っている。

お金のための仕事に費やす時間はほとんどない。

基本的には週休５日～７日。

働いても１日２～３時間程度で、たいていは自宅の部屋やカフェでノートパソコンか携帯で済ませてしまう。

月に１日も仕事をしないこともよくある。

旅行が趣味で、ふと思い立ったら国内外を問わずふらりと出かけていく。

細かな予定は立てない。
帰りの切符も買わない。
最低限の着替えと旅行誌のるるぶだけを持って、とりあえず電車や飛行機に乗り込んでしまう。
何をするか、どれくらい滞在するかは現地についてから考える。
足りないものは現地調達する。
半月や一か月くらい帰らないこともよくある。
地元の友人や両親、飼い犬に会うために、１～２ヶ月に一度は必ず地元の鳥取に帰省している。

食事はほとんど外食ですませている。

最初は住みたい街として人気があるという吉祥寺に住んだが、すぐによりアクセスが便利で、美味しい飲食店がたくさんある下北沢に引っ越した。

特に値段は気にせず、食べたいものを注文する。

物欲はあまりないが、お酒や食べ物には結構お金を使っている。

小説の勉強をするためにもう一度大学に通ってみるのも面白そうだと思ったが、それより音楽を勉強したい思いが強かったので、28歳になってから音楽学校に入学した。

ギターやベースや作曲ソフトを買い、部屋をプチスタジオ化して、楽器の練習や作曲をよく飽きるまでやっている。

なにぶん始めたのが遅いので腕は素人だが、機材だけはプロが使うようないいものを使っている。

将来的には人前で自信をもって活動できるくらいのスキルを身につけたいと思う。

他にも読書が好きなので、温泉地などのホテルに何日も引きこもって、延々と本を読んでいることもある。

気づけばこんな自由な生活を手にしている僕だが、別に宝くじに当たったわけではない。

ある出来事がきっかけで在学中に起業せざるを得なくなり、それから5年の間に約3億円を稼いでしまったのだ。

起業していると言っても人を雇っているわけではないので、人間関係のストレスもない。

店舗やオフィスを構えているわけでもないので、場所に縛られることもない。

僕自身が忙しく働かなくても安定して収益が発生するので、20代にして趣味中心のセミリタイア生活を送ることができている。

まさかあの満員電車に揺られた日から、ほんの数年後に自分がこんな生活を送るようになるとは、夢にも思わかった。

僕はほんの数年前まで、山陰の田舎の片隅で普通の大学生をやっていたはずだったとりあえず家から一番近かった大学を受験し、前期試験に落ち、後期試験でなんとか合格した。

学部は法学部を選んだが、別に法律に興味があったわけでも、将来弁護士になりたかったわけでもなく、ただその学部が一番就職率が良かったのだ。

日中は眠たげな顔で授業に出席し、授業の空き時間は所属している文芸サークルの部室でくだを巻いた。

小説を読んだり書いたりするのが好きで、いつかは小説で賞をとってみたいという夢があった。

学校の勉強よりもサークル活動に熱中した。

しかしお金を稼がなければならなかったので、平日の夕方以降や休日はひたすらバイトに明け暮れていた。

自由を求めて23歳の時にインターネットビジネスで起業した。

といっても元から起業・ビジネスというものに興味があったわけではない。

ほとんどアルバイトの延長みたいな感覚で、インターネットでいくらかでもお金が稼げれば、生活も楽になるし、家の借金返済にあてられる、というような単純な動機で始めた。

しかし実際にインターネットビジネスを始めてみたら、あっさりアルバイトの収入を上回って、半年も経たないうちに月収１００万円を超えてしまった。

ただのまぐれだとも思ったが、翌月も翌々月も月収１００万を超えた。

僕の心の準備すらできていないうちに、あっさりと僕の人生は予期せぬ方向へ転がり始めた。

親の借金は全部返済した。

節税のために法人化せざるをえなくなり、株式会社を設立した。

といっても社員もオフィスも存在しないのだから、当の僕に会社を経営しているという感覚はまるでなかった。

インターネット上に作った仕組みから毎日収入が発生し、それでご飯を食べながら好きなことをしているというだけの話だった。

すべての仕事はパソコン一台で完結した。

僕はそれまで、人は学校を卒業したら、一生懸命就職活動をしてサラリーマンになり、定年まで忙しく働くしかないものと思っていた。

サラリーマンという道から逃れるにはニートになるしかなく、家が極貧な僕はホームレスになるしかないのだと思っていた。

もちろん起業や投資でご飯を食べている人たちがいることも知っていたが、そんな世界で成功できるのは、ごく一部の金持ちや天才だけだと思っていた。

だから、コストをかけずにインターネットで起業して、パソコン一台でお金を稼いで自由に生きるという選択肢があるのだと知ったとき、僕は心の底から救われた気がした。

実際に自由を手に入れた今、あのときの感動を少しでも多くの方に伝えたいと思って、こうやってこの本を書いている。

本書では、資金・知識・人脈ゼロのただの田舎の貧乏学生だった僕が、恐る恐るインターネットビジネスという世界に飛び込み、自由な人生を手に入れるまでに見たこと・経験したこと・感じたことなどを、赤裸々に本音で語っている。

もちろん楽しいことばかりではなくて、人と違う生き方をすることに対する不安や葛藤もあったが、そういうものも正直に告白しようと思う。

パソコン一台でお金を稼ぎ、会社に束縛されず自由に暮らす僕のような生き方は、近年徐々に増え始めているらしい。

東京に来てからそういう人たちと数えきれないくらい知り合ったし、僕の影響でインターネットビジネスを始めて今や自由な人生を送っている人も多数いる。

インターネットの普及する以前は存在しなかったライフスタイルだから、中高年の方にはなかなか理解されないが、インターネットで個人が稼ぐという行為は、今後ますます一般的になっていく。

昔と違い、ブログ、メールマガジン、動画サイト、SNSなど、個人が影響力を持つ手段は今やいくらでもある。

ヤフオクやアマゾンなどを使えば個人でも簡単に商品を売れる。

書類を作るのも、会議をするのも、たいていは携帯やパソコンがあれば完結してしまう。

インターネットを使えば起業のコストはほぼゼロに近い。

個人で収益を得られるようになれば、毎日何十分も何時間も通勤電車に揺られて特定の場所に集合し、時間を管理されながら決められた時間働くという行為に必然性はなくなっていく。

やがてそういう働き方は古臭いものとして敬遠される時代がやってくるかもしれない。

自由を手に入れるための具体的な方法や考え方については、別著の「自由な人生を手に入れる教科書」で詳しく解説しているので、ぜひ読んでみてほしい。

あなたがお金にも時間にもゆとりのある自由な人生を手に入れるということに少しでも興味があれば、参考になる部分は多いはずだ。

当時の僕のように、サラリーマンとして雇われて生きることに漠然とした不安感、閉塞感、抵抗感があるが、かといって貧しいホームレスのような暮らしはごめんだ、という人に、僕は第三の道を示したいと思っている。

誰にも雇われず、自分で稼いで豊かに自由に生きるという道だ。

別に僕がやってきたことを真似していただく必要も、共感していただく必要もないが、こんな生き方もあるのだとあなたに知っていただければ、それだけで十分この本を書いた甲斐はある。

目次

僕の人生から就職が消えた……22
月収200万円の憂鬱……37
起業に興味のない起業家……44
燃え上がる家……51
麗しき労働の日々……67
地獄のような労働との遭遇……79
労働、この恐るべきもの……93
システムの隅っこにあいた風穴……113

僕はアフィリエイトで生きていこうと思った……127
100万円という札束……137
資本主義のてっぺんらへん……143
香港旅行中にサラリーマンの年収分稼ぐ……153
手に入れた自由な人生……162

僕の人生から就職が消えた

子供の頃、自分は将来会社員か公務員になるのだと確信していた。

それは僕の中で、太陽が東から昇って西へ沈むのと同じくらい自然なことだった。

高校までは比較的真面目な子供だった。

先生たちの善良さ、聡明さを疑わなかったので、彼らの言う通り、一生懸命いい子になろうとした。

テストでいい点をとって誉められると純粋に嬉しかった。

学年で3位になったこともあった。

皆の前で誉められると優越感で鼻がむずむず動いた。

ルールには厳格に従った。

服の裾をはみ出させることすら躊躇する中学生だった。

たとえ監視のない場所でも、目には見えないものからの処罰を恐れた。

いつも怒られている不良たちをバカだなぁと思っていた。

でも彼らに対する劣等感はいつもあった。

毎日12時には寝て、7時すぎには起きた。

当然モテなかった。

親や教師が大学に行けと言ったから、そうすることにした。
普通に受験勉強をして、普通に進学校に合格した。

その頃テレビゲームやオンラインゲームにハマっていた。
毎日猿のようにゲームをやった。
部活にも入らず、学校が終わると飛んで帰って。パソコンの前に座った。
架空のモンスターを倒してウキョウキョ喜んでいた。
高校時代は風のように過ぎた。
特別なりたいものなどなかった。

将来は漠然としていた。

しかし「安定」の大切さだけは耳にタコができるほど聞かされていた。

親戚には公務員が多く、警官や消防士や市役所職員や学校の校長なんかがいた。

誰かが公務員になったというと親戚中が祝った。

なるほどどうやら公務員とは勝利であるらしいと悟った。

ゲームのしすぎであまり成績は良くなかった。

貧乏だったので、実家から通える地元の大学に進学した。

就職率がもっともよいという、ただそれだけのことで学部を選んだ。

そこで初めて僕は青春をした。
腹を割って話せる友達ができたし、サークル活動にも没頭したし、
勉強の楽しさも知ったし、恋人もできた。
ゲームは自然としなくなった。

そして働くということを知った。
いわゆるブラック企業で、お金のために毎日深夜まで単純労働をした。
社員達は働いて、ご飯を食べて、寝るだけの家畜と変わらない日々を送っていた。
愚痴と冗談と猥談を口ずさみながら、来る日も来る日も朝から晩まで同じ動作をループしていた。

彼らの生活の大部分は狭い店のルーチンワークに消えた。

僕は未来に横たわる約40年間の労働を思って心底恐怖した。

終身刑だと思った。

大学に入ってようやく手に入れたものを、根こそぎ奪われる気がした。

大学３回生の後半になると、学生たちの話題は徐々に就職活動一色になった。

エントリーシート…合同企業説明会…リクナビ…面接…ＳＰＩ…企業研究…

スーツ姿が内定目指して一斉に同じ方向へ雪崩をうつ中、僕は真っ青になりながら全速力で反対の方角へ逃走した。

就職関連のイベントはことごとく無視した。

好きだった小説で飯を食っていこうと思った。

授業にはあまり出なくなった。

当然、周囲からの就職への圧力は凄まじいものがあった。

親や親戚や友人や彼女や教授たちからみれば、僕は堕落してしまったのだった。

全方位から攻め立てられて、大学４回生の夏、ようやく重い腰をあげた。

リクナビに登録してみたが、もはや誰からも見向きされない、スーパーの売れ残り食材のような会社しか求人がなかった。

２社受けてみたが、１社目は落ち、２社目は最終面接をボイコットした。

僕は黙々と時給７２０円の単純労働を繰り返した。

投稿した小説はあっさり一次審査で落ちた。

裁判所から財産差し押さえ通告が来た。

僕の人生は晩年にさしかかっているのではないかと思った。

とにかく金が必要だった。

ネットでたまたま知ったせどりを試してみた。
３ヶ月でバイト先の店長の給料を超えた。
僕は面食らった。

次にアフィリエイトを試してみた。
４ヶ月後に月収１００万超えた。
ネットビジネスを始めて１年も経たないうちに、
信じていた世界が根底から崩壊した。
節税のために法人化した頃には、誰も就職しろと言わなくなっていた。

僕の人生から就職が消えた。

スーツとネクタイが消えた。

時計が消えた。

土日が消えた。

祝日が消えた。

通勤が消えた。

時給が消えた。

上司が消えた。

残業が消えた。

秩序が消えた。

無理に大学に通う必要もなくなった。

気付けば色々な義務や束縛がなくなっていた。

時間とお金だけが手元にあった。
カレンダーはどこまでも白紙だった。
それまで熱心にたどってきたレールが突然途絶えて、前後左右どこを見ても茫漠とした地平線が広がっていた。
毎日起きたら「今日は何をしよう」と考えるところからスタートだった。

あるとき観光地の温泉に入った。
平日の昼間は老人しかいなかった。
老人たちにまぎれて独り体を洗った。

脱衣場にテレビがあったので、風呂上りに扇風機に当たりながらなんとなく見ていた。

経済のニュースだった。

長引く不況に対してサラリーマンたちが怒っていた。

「リストラされた」

「給料が上がらない」

「ボーナスカット」

「小遣いが減った」

「就職率が低下」

僕はそれまでそういうニュースに興味をもっていたはずだった。
しかしそのときは、彼らが何か別の宇宙の話をしているのではないかと疑った。
それらは僕にとってあまりにも無縁な言葉たちだった。

埼玉の友人を訪ねたとき、朝の電車に乗った。
電車はサラリーマンや学生でごった返していた。
決められたスケジュールに従い、会社や学校に大急ぎで向かう人たちの群れを、僕は座ったまま口を開けて眺めていた。
彼らは猛烈な勢いで電車に飲み込まれたり、吐き出されたりしていた。

あれほど嫌悪していたスーツとネクタイに対して、ほとんど何も感じなくなっていることに気づいた。

地球の反対側の知らない国に住む人たちを見るような目で彼らを見た。

ある日、朝のテレビの占いで「今日も元気に出勤しましょう」と明るく言われたとき、僕は彼らの社会からすっかり弾き出されていることを知った。

これからは一人で生きていかなければならないぞ、と改めて思った。

月収200万円の憂鬱

こんなことを書くと反感を買うかもしれないが、月２００万くらい稼げるようになったばかりの頃、僕は暇で暇でしょうがなかった。

２０１０年頃の話だ。

その数カ月前までは僕はダイソーで時給７００円でレジを売っていた。

大学は休学していた。

ネットビジネスを始めて数ヶ月後、それまで忙しく日々を送っていた僕の元に、突然膨大な時間とお金が手に入った。

３６５日、２４時間。

すべての時間が自分の自由になる状況を想像してみてほしい。

いうなれば永遠の夏休み状態。

こんな小学生の妄想じみた状況が、まさか現実に自分の身に訪れようとは、夢にも思わなかった。

勝手に作ったブログやサイトが働いてくれた。

夜寝て朝起きたら10万円くらい報酬が発生していることがよくあった。

お金の使い方なんて知らなかった。

それまで牛丼に卵をのせることをためらうほど貧乏だった。
田舎だしテレビも見ないので、物資的欲望が刺激されることも少なかった。

とりあえず欲しかった本をまとめ買いしてみた。
興味のあった楽器も買ってみた。
親の借金もヤバそうなところから返した。

そうしている間もずっとふわふわした浮遊感があった。
ある意味放心状態とも言えるかもしれなかった。

寝たいだけたっぷりと寝て、

カフェで読みたかった本を読んで、
楽器を指が痛くなるまで練習して、
飽きるまでネットサーフィンをしても、
まだ一日が終わらなかった。

正直時間を持て余した。

それまでの僕のモチベーションと言えば、労働やお金に束縛された人生から解放されたいという強烈な欲求だった。

好きなときに、好きな人と、好きなことをする自由を手に入れたい。

一度きりの自分の人生を、思い切り自分のために使いたい。

そうした人生をかけた目標を、ほとんど瞬間的ともいえるほど短い時間の間に叶えてしまった僕は、一時的に漂流してしまった。

それ以上お金を稼いでも使い道なんて想像できなかったから、１日１時間程度のメンテナンス作業以外、ほとんど何もしなくなった。

自由になったといっても、友人達は自由じゃなかったし、４年つきあった彼女にも振られていたから、必然的に僕は多くの時間を一人で過ごした。

田舎だから起業家のコミュニティのようなものもなかった。

家の近くに温泉街があった。

平日の昼間は老人ばかりだった。

人生の勤めを終えて、弛緩しきった老人達の皮膚を眺めながら、来る日も来る日も呆然と湯に浸かった。

適当に旅行もしてみた。

混雑する連休を避け、平日に行動した。

どの観光地に行っても老人だらけだった。

彼らはいつも緩慢に歩きながら、顔をしわくちゃにして笑ったり喋ったり怒ったりしていた。

俺の世界は老人ばかりになってしまったぞと思った。

自分の体までしわしわになっていく気がした。

起業に興味のない起業家

ネットビジネスが軌道に乗り始めた頃、法人化の必要に迫られていることに気づいた。

個人のままやっていると税金が大変なことになるからだ。

起業。

これは僕にとって全くなじみのない言葉だった。

僕は自由になりたかっただけで、別にビジネスをやりたいわけでもなかった。
経営者という人種の哲学や人生に興味を持ったこともなかった。
ビジネス書も経済新聞も読まなかった。
起業家と宇宙人は僕の中でほぼ同義だった。
自分で事業を興せるような人間は、とてつもなく優秀で、自分とは全く異なる脳構造や精神構造をもっているのだと思っていた。
本やネットで一生懸命調べて、とりあえず法務局とやらにいけばいいのだと知った。

25万円ほど払えば誰でも社長になれるらしかった。

僕は法務局なんてものがあることすら知らなかった。

とりあえず書類を揃えた。

はんこも一番安いやつを買った。

会社名は迷った。

会社なんてどうでもよかったし、節税のために便宜上作るものだったから、何の思い入れもなかった。

英語辞書をぱらぱらとめくってみたら、なんとなくそれっぽい単語が目に入ったので、深く考えずにそれを会社名にした。

代表取締役というところに自分の名前を書いて提出した。

その瞬間、社長とかいう人種に僕はなった。

学生時代、あれほど僕が忌み嫌っていた会社という組織のトップになった。

一時期資本論やプロレタリア文学に熱中し、蟹工船のエッセーコンテストで賞金をもらったこともある僕が、立派に資本主義の尖兵になった。

僕は思わず笑ってしまった。

今も社長と呼ばれると若干の居心地の悪さを感じる。

起業を志す学生に教えを請われることもある。

彼らの熱い思いに耳を傾けていると、こんなニセモノが起業家なんかになってしまい申し訳ないとも思う。

正直僕は国家も社会も経済も興味がない。

よくテレビに出てくる経営者達がもつような使命感もない。

地位や名声を得たいという欲望もない。

僕と僕に関わる人間が幸せになればそれでいいと思っている。

一生自由にやりたいことだけやって暮らせればいいと思っている。
そのためにはお金が必要だから、効率のいい方法を選んでいるだけだ。

税金は収めるし、ルールは守るが、それ以上のことは考えていない。
国や社会に１億渡すくらいなら父ちゃんと母ちゃんに
１億渡したほうが百倍ましだと思っている。

だから野心をぎらぎらさせた起業家や、国家社会のために心血を注ぐ起業家をみると、正直威圧される。
人前では大人しくしていようと思う。

会う人によく「オーラがない」なんて言われるのはそのせいかもしれない。

燃え上がる家

朝鮮戦争の頃に父は生まれた。

中学を卒業してそのまま職業訓練校に行き、

襖や障子などを作る建具の技術を身につけた。

その後、職人の元に弟子入りして修行し、20代前半で独立した。

折よくバブルがやってきた。

電話帳に数万円で広告を出せばそれだけで注文が殺到した。

近所の田畑や空き地が狭まり、雨後の筍のように新築の家が建った。

父の技術は口コミを呼んだ。

金を手にした父は王者のごとくだった。

月に１００万稼ぐ月も珍しくなかった。

幼い僕の姉や兄を実家に任せて、父は朝から晩まで母とともに猛烈に働いた。

家庭では専制を敷いた。

学のない父の直感と経験と気分によってすべての物事が決められた。

口答えをする者がいれば平手を食らわし、言いつけを守らない者がいれば物を壊した。

母はただ父に服従するのみだったが、
読書家で理知的な姉は成長するとよく父と衝突した。
言い争いになれば常に姉が勝った。

しかし父には腕力があった。
道理で敵わぬと知るや、すぐさま拳や物が飛んだ。
「誰が飯を食わしとる」とよく言った。
熟れた柿を顔にぶつけられて泣く姉の姿を今も覚えている。

父は車を買った。
当時高かった巨大なテレビを買った。
20代にして家を建てた。
さらに数年後、数百万かけて家を増築した。
僕と兄をプロ野球選手にしようという野望があるらしかった。
破竹の快進撃はそこで終わった。
バブルの終焉に伴い、新築の仕事が劇的に減った。
中国や東南アジアで大量生産された、圧倒的に安い輸入商品が攻め寄せてきた。

家を建てる世代の若者達が洋風建築に憧れるようになった。

襖や障子を作り、電話帳に広告を出すことしか知らない父は、急速な世界の変化に戸惑うのみだった。

自分の制作物よりはるかに質の低い商品が売れていく実情に憤慨した。

「見る目がない」と人々のことをののしった。

過疎化と高齢化で、お得意様は減るばかりだった。

僕と兄は野球をやめ、父の野望は断たれた。

父は初めて暇をもてあました。

がむしゃらに働いて金を稼いできた人生だった。
友人は少なく、空いた時間を何で埋めれば良いのか分からなかった。

精神の拠り所を、数少ない趣味だったパチンコに求めた。
毎日朝から晩までパチンコをした。
刹那的な感情で行動する父だから、負けるときは平気で5万や10万負けた。
そのぶん勝つ金額も大きかった。

最初は嫌悪を示していた母も、父の熱心な勧誘によって見事にパチンコに狂った。
夫婦揃ってパチンコの開店時間に並んだ。

勝った日は平和だったが、負けた日は食卓に必ず嵐が吹いた。
負けると取り返そうとしてますます意固地になった。
夫婦が10年以上働いて貯めた財産は瞬く間に溶けた。
生活に困窮するようになり、消費者金融に手を出したが最後、借金は乾いた藁の山に放たれた火のように燃え上がった。
僕が家の窮状を知ったのは高校を卒業した頃だった。
末っ子の僕に借金の存在は秘匿されていた。

それでも分別のつく年頃になってから、なお数年の間、何も知らずに安穏と暮らしてきたのは愚かと言うほかない。

僕はひたすらゲームに夢中だった。

貧困の予兆はあった。

父の働く日は極端に少なくなっていた。

パチンコで負けて喧嘩をしている日の方が多かった。

金を無心された姉がよく憤慨していた。

督促の電話や手紙を受け取ることがあった。

それでも大学には行かせてもらえた。

奨学金と学生ローンは全額借金の返済にあてた。

バイトで稼いだ給料の一部を家に納め、俺も家に貢献しているぞと得意になったが、それは借金の利息にも満たなかった。

父は消費者金融の借金を、別の消費者金融から借りた金で返していた。

その消費者金融の返済期限が迫れば、また別のところから借りた。

いわゆる多重債務者だった。

親戚からはいよいよ借りれなくなった。

往年の覇気は見る影もなく、父の背中はみるみる萎んだ。
電気やガスが頻繁に止まった。
父は姉からますます苛烈に金を取り立て、僕には逆に猫なで声で金をせびった。
長男の兄は火の手から逃げ出すようにして別の土地へ移った。

ある日5万円貸してほしいと母に頼まれた。
それまでにも散々貸していた。
貸すといっても返ってくることはまずなかったし、
田舎の安い時給で5万円は大金だったから、僕は拒否した。

すると「家がなくなる」と言って母は泣いた。

これ以上滞納すれば差し押さえは免れないらしかった。

僕としても全人生を過ごした家を失うことは悪夢だったから、断腸の思いで口座から5万おろして渡した。

翌日、父がその金をすべてパチンコで失ってきた。

詰問する僕に、父はどす黒い顔をして反駁した。

「増やさにゃ生きていかれん」

督促を恐れて、父も母も電話に出られなくなった。
家族団らんの最中に電話が鳴り出すと、全員が息を詰めてコールが終わるのを待った。
あまりにも頻繁に鳴るので、父は電話線を抜いてしまった。
当然仕事の注文もこなくなった。
どこかに雇ってもらってはどうかと勧められても、父は一切耳を貸さなかった。
建具の技術は学のない父が唯一他人に誇れるものだった。
一時代を築いたという自負もあった。
これを捨て去ることはすなわち彼の人生の否定だった。

それに父は50歳を超えていた。

世間の常識を知らなければ、敬語の使い方も知らなかった。

その父がまともな職にありつけるとは、父のみならず家族すらも到底想像できなかった。

代わりに母が親戚の水産工場でパートを始め、数日後に転んで他愛もなく骨折した。

それ以来足を悪くし、立ち仕事ができなくなった。

財産差し押さえ通告がきたとき、僕と父は笑い、母だけがため息をついた。

みかねた親戚が助け舟を出してくれたが、破局をほんの少し先延ばししたにすぎなかった。

家の便所は未だに汲み取り式だったが、汲み取り代が払えず、便所が汚物であふれた。

もはや消費者金融さえも金を貸してくれなかった。

熟睡できない父のうめき声が深夜にとどろくようになった。

それはほとんど絶叫で、人間のものというより、獣の遠吠えに近かった。

僕と母はいつもびっくりして跳ね起きるのだが、当の父はまだ目をつむって悪夢の中にいた。

人間とはあんな風にうめき声を上げるのかと思った。

自己破産してはどうかと言ったら、「恥ずかしくて外を歩けなくなる」「ご先祖様に申し訳が立たん」と言われた。

そもそも自己破産する金もなかった。

両親には法の知識も、金を稼ぐ知識もなかった。

それらの知識が必要だということすら知らなかった。

ギャンブルと宝くじだけが彼らを借金から救いうる唯一の方法だった。

元手がないので、来る日も来る日も１円パチンコをしていた。

犯罪だけはせずにいた。

麗しき労働の日々

僕が泡を噴きながらネットビジネスの世界へ逃げ込んだのは、第一に家庭の貧困、第二に労働への恐れからだった。

どちらの比重が大きいかと問われれば、まぎれもなく後者だと答える。

僕が経験した最初の労働は18歳のときだ。

どうにか大学には入学したものの、パチンコに狂い多重債務者となった両親からの援助など期待できるはずもなく、自分で働いて金を稼ぐ他に道はなかった。

さっそく家の近くのカラオケ屋兼ゲームセンターでアルバイトをした。

時給６５０円という、法定最低賃金ぎりぎりの、今思えば涙の出ててくるような時給だったが、それでも１日８時間働けば５０００円くらいにはなった。

当時の僕からすれば５０００円は大金だったし(ゲーム１本買える！)、月末には５万以上の給料が振り込まれた。

そのような途方もない金を一度に手にする機会は、それまで正月のお年玉くらいしかなかった。

僕は初めて体感する労働というものの威力に少なからず興奮を覚えた。

肉体一つあれば金を稼ぐことなど簡単なことだぞと思った。

職場の環境もまた素晴らしく良かった。

僕が胸をときめかせながら初出勤すると、さっそく先輩に大量のポテトとコーラを振る舞われた。

もちろん誰も金を払っていない。

アルバイトたちは無断で飲み食いしているのだ。

僕はアルバイト経験などなかったので、そういうものなのかと納得し、働くとはなんて素晴らしいことなのだろう歓喜した。

店にはとにかく客がいなかった。

一世代前の機器。

すぐにハウリングを起こすマイク。
色あせた壁と綿がはみでたぼろぼろの椅子。
音質の悪いスピーカー。
まずいと客から苦情が来るほどまずい料理。
5回客を案内すれば1回はクレームがくるほどひどいカラオケ店だった。
それでいて料金は他の店と同じくらいとるのだから、客などくるはずがなかった。
店長は別の店と兼任していて、滅多にカラオケには顔を出さなかった。

ある先輩は勤務時間中ずっとノートパソコンでエロゲーをしていたし、他の先輩は大量に漫画を持ち込んで読み漁っていたし、ＤＳやＰＳＰが発売されてからはそれが流行った。

とにかくすることがない。

朝に30分ほど掃除をしたら、あとは客がくるまで呆然としていなければならない。

たとえ客が来たところで、部屋に案内したらオーダーでもこない限りもう仕事はない。

僕はひたすら小説や漫画を読んだ。

僕の仕事はむしろ読書といってもいいくらいだった。
読書に飽きたら目的もなく店中をうろうろした。
暇なので先輩とピザをつくり、その上にから揚げやフライドポテトを山盛りにして喜んでいたら、たまたまやってきた店長に見つかって冷や汗を掻いたこともあった。
交代の時間以外は、勤務は基本的にアルバイト一人だ。
僕が勤務時間外に店に遊びにいくと、先輩がレジの前に突っ伏して鼾をかいていることがあった。
別の先輩はよく近所の本屋までジャンプを買いに行った。
その間店はもぬけの殻だ。

さすがに僕にはそこまでする勇気はなかった。

営業時間は深夜の１時までだが、12時半になって客がいなければさっさと店を閉めた。

それから部屋にこもって思う存分歌った。

時には先輩たちが遊びに来て、閉店後一緒に歌ったりもした。

おかげでずいぶん歌がうまくなった。

１日の売上がトータルで４２０円だったこともあった。

閉店間際、先輩アルバイトがさすがに情けなくなって、４２０円のピザを一枚買って帰ったのだ。

朝10時から深夜１時まで来客数ゼロは後々までの語り草になった。

僕はこの仕事を気に入っていた。

椅子に座って本を読んでいれば金がもらえるだから、文句などあるはずがなかった。

働くことは良いことだった。

唯一の不満と言えば、夕方になると近所に住む不良たちがしばしば大挙して押し寄せてきて、ゲームコーナーを占拠してしまうことだった。

学生服を着た中学生たちが、咥え煙草をしながら、見事な貫禄で深夜までスロットをうった。

気に入らないことがあるとすぐに機械を殴り、店員の姿が見えなくなれば景品を盗もうとした。

不良どもの横暴に堪え兼ねた先輩が、ある日椅子を振り回して彼らの一人を店から追い払ったところ、翌日に全身入れ墨をした上半身裸のチンピラが中学生の不良どもを引き連れて怒鳴り込んできた。

中学生達の前で先輩は土下座させられ、僕はその横で滅多にない量のオーダーをこなすために一人で走り回った。

土下座する先輩を見て、警察を呼ぶべきかとも思ったが、報復を恐れた先輩に止められた。

不良達の横暴はその後リーダー格の中学生が傷害で少年院に送られるまで続いた。

知らせを聞いた僕らは意気揚々と祝杯をあげ、再び安逸と怠惰の日々を取り戻した。

僕が働き始めて1年ほどたったある日、突如として店は潰れてしまった。

楽しい労働の日々はそこで終わった。

途方に暮れた僕は次にファミレスのキッチンでアルバイトを始めた。

この職場は言語を絶した。

ここでの労働経験が、その後の僕の人生を思い切りねじ曲げてしまった。

地獄のような労働との遭遇

カラオケ屋がつぶれた後、大学近くのファミレスでアルバイトをすることになった。

シミひとつない純白のコック服に身を包み、胸をときめかせながら初出勤した僕を出迎えたのは、巨大なシンクを埋め尽くす汚れた皿の山だった。

皿洗いがこれほど憂鬱な仕事だということを僕は知らなかった。

ひたすら食器を擦ってこびりついた汚れを落とし、洗浄機に放り込んでいくだけの仕事だが、その過酷さは工事現場の土方にも劣らなかった。

茶碗にこびりついた米粒や鉄板の焦げ付きは、タワシで渾身の力をこめて擦らないと落ちない。

常に前かがみの姿勢なので腰に疲労が溜まる。

ホールの店員は次々と汚れた皿を客席から持ち帰ってきて、ステンレス台の上に無遠慮に積み上げていく。

ピークタイムには洗浄機の動作が食器の積まれるスピードに追いつかず、僕が持てる限りの力と汗を振り絞って皿や鉄板を磨いても、食器の山は減るどころか逆にさらなる高みを目指してむくむくと隆起していく。

スピードを上げろと怒鳴られたってどうなるものでもない。

熱湯を噴き出す洗浄機からはもうもうと湯気が押し寄せてくるため、夏の洗い場はほとんどサウナと変わらない。

厚手のコック服は通気性などないに等しい。

飛び散る湯と迸る汗で、５分と待たずに濡れ鼠だ。

こまめに水分補給しないとすぐに脱水症状になる。

カラオケ屋のぬるま湯のような環境で骨の髄までふやけていた僕は、予想していたものと全く違う、この地獄のような労働との遭遇に震撼した。

みんなで和気あいあいとおいしいものを作り、たまにつまみ食いでもしていれば金がもらえるはずではなかったか？

労働とは確かそういうものではなかったか？

あのカラオケ屋を燦然ときらめかせていた同僚たちーー

客の目を盗んで惰眠をむさぼり、

勤務中にゲームと漫画に没頭し、

笑いながら軽々と不正をこなし、

店をからっぽにしてジャンプを買いに出かけ、

客がいなければ勝手に閉店し、
ときには不良どもに椅子を振り上げて襲いかかる、
あの愉快な同僚たちは一人もいなかった。
皆顔中を汗まみれにしながら、厳しい表情で、ビデオの早送りのように同じ動作を繰り返していた。
あまりの忙しさに、同僚たちはいつも眉間に皺を刻んでいた。
ピーク時には罵声と怒号が飛んだ。
お盆やゴールデンウィーク、年末年始などのかきいれ時には、1日の労働時間は12時間を超えた。

休憩は昼と夕方に30分ずつ。
あとはひたすら汗だくになって前かがみの姿勢で狂ったように皿を洗った。

最初は色々なことを考えた。
これが本物の労働なのか？
僕は皿を洗うために生まれてきたのか？
こんな労働は本当に人間がやるべきものなのか？
これはいわゆる搾取というものではないのか？
同僚たちは何も感じないのか？

しかし2時間も3時間も皿を洗い続けると、暑さと疲労で朦朧としてきて、徐々に何も考えられなくなった。

時間の感覚も失われた。

皿と湯と洗浄機だけが世界のすべてになった。

皿洗いが10時間を超える頃には、僕は思考も感動も停止して、ただ無表情に皿を洗う機械の一部と化した。

洗うべき食器が一時的になくなることもあった。

僕の手が少しでも空いたと見るや、店長や先輩はありとあらゆる雑務を僕に振った。

「キャベツとニンジンの処理よろしく」
「ステーキソース作っといて」
「ジャガイモのスライスもお願い」
「サーロインとヒレを十枚ずつ解凍しといて」
「味噌汁サプライして」
「次のライス炊いとけよ。間に合わなかったら目も当てられねえぞ」

経験の浅い僕の処理能力はたちまちパンクして、野菜くずの散らばる床の上を錯乱状態で走りまわった。

冷蔵庫の中身を混ぜ返し、暴力的に器具を洗い、野菜や肉に包丁を叩きつけた。
指も切ったし火傷もした。
洗剤がはねて野菜にかかっても知ったことではなかった。
そうこうしているうちに洗い場はまたしても汚れた食器であふれかえった。

仕事はどう考えても僕の手に余ったが、本当にスピードを求められるときは先輩が応援に来た。
可愛いなと思っていた先輩の女の子に「ちんたらやってんじゃねぇ！」と吐き捨てられた時は、奈落の底に落ちる気分だった。

しかし彼女の包丁捌きには舌を巻いた。
目にもとまらぬ早さと機械のような精密さでジャガイモやタマネギを刻んだ。
皮や葉の部分はまな板に向かったまま後ろ手で投げ捨てたが、力の加減を完璧に把握しているのか、それらはことごとく背後の離れた場所に設置してある屑籠の中に正確に吸い込まれた。
あれほどの熟練を得るためにはどれほどの膨大な時間をこの憂鬱な労働に捧げなければならないのだろうと僕は恐れた。
当然落伍者も多かった。

新人の半分は最初の皿洗いで腰を抜かして辞めた。

おかげで僕はなかなか皿洗いから抜け出せなかった。

僕自身辞めることを考えないでもなかったが、それまでアルバイトを自ら辞めるという経験をしたことがなかった僕には、世話になっている店長に辞意を伝えるというのはなかなか勇気のいることだった。

まごついているうちに時間が過ぎた。

２００℃の油を全身に浴びたり、割れた食器の破片が目に飛び込んだりして、病院送りになる同僚も多かった。

強い洗剤で手は砂壁のように荒れ、ところどころひび割れた。

帰るのはいつも午前2時か3時だった。
金を稼がねばならないのと、人手不足が深刻なのとで、休みはほとんどとれなかった。

僕はノイローゼになりかけていた。
夜布団に入って目をつむると、遠くから皿のぶつかりあうカチャカチャという音が聞こえてきた。
ラジオのボリュームのツマミをゆっくり回すように、それは苛烈な騒音に変わって脳内に反響した。

シンクを埋め尽くす皿の映像がまぶたの裏を流れた。
布団の上を転々としてみても、目をこすってみても、耳をふさいでみても、効果のある相手ではなかった。
なかなか寝付けない日々が続いた。
翌日バイトがある日はいつも胸がつぶれそうだった。
徐々に午前中の講義に出られなくなっていった。
単位をいくつも落とし、ついに留年が決まった。
家族や親戚が喚き、店長や他のバイトは笑った。

ある日ついに出勤するのをやめた。

時間になっても布団から起き上がることができず、ぼんやり目を開けたまま、壁掛け時計の針が進むのを眺めていた。

出勤時刻を過ぎてもそのままでいた。

店長から電話がかかってきたが、それに出る勇気もなかった。

そのまま二度とファミレスには顔を出さなかった。

後には落後者特有の恥ずかしさと、労働に対する憎悪だけが残った。

労働、この恐るべきもの

労働とは恐るべきもの。

徐々にそんな確信が僕の中で育っていった。

思い起こせば、いくつもバイトを経験する中で、僕がこうありたいと憧れるような労働者は一人もいなかった気がする。

僕の生まれて始めての店長は、ちょこまかと動く背の低い眼鏡のおじさんだった。

几帳面な性格で、業務に一切手抜きはしなかった。

働くということを知ったばかりの使い物にならない僕に、手取り足取り教えてくれた。

店のオーナーは白髪の老人で、大きな耳とシワだらけの顔が猿そっくりだったので、猿じいと陰で呼ばれていた。

猿じいの仕事は日々の売上を銀行に入金することくらいだった。

一応毎日店に顔を出したが、ほとんどの時間は楽器を弾いたり、店をウロウロしたり、店にやってくる子供たちと長話をしたりしていた。

店は猿じいが道楽でやっているようなものだった。

この猿じいに店長は目の敵にされていた。

カラオケ屋の売上は時に１人も客がこないほど悲惨だったが、その原因はバイトの目から見ても明らかだった。

カラオケの機械は一世代どころか二世代も前のもので、マイクはすぐハウリングし、椅子や壁はボロボロだった。

それでいて料金が安いわけでもなかった。

だれがわざわざこんな店を使うのかと、バイト達ですら首を傾げた。

しかし猿じいの曇った目には、売上が少ない原因はもっぱら店長の無能もしくは怠惰によるものと映った。

猿じいの説教は長くて有名だった。

ときには二時間以上説教し続けることもあった。

（30分ほど説教したかと思うと、またもとの話題にループしたりした）

店長はいつもうなだれて説教を聞いていた。

客が来ないので説教が中断されることもなかった。

店長が新しい機材を導入したいと言っても、「そんなことは売上を増やしてから言え」と一蹴された。

売上が悪い見せしめに、店長は平社員とまったく同じ給与だった。

バイト達の前でも猿じいは平気で店長の悪口を言った。

店は中学生の不良たちにたびたび占拠された。

店長は彼らを追い払いたがっていたが、肝心の猿じいが近所でくだを巻いている不良たちを店に呼び込んで、菓子やジュースを配ったりするので、手が付けられなかった。

一度店長が煙草を吸っていた中学生を注意したら、「余計なことをするな」と猿じいに怒鳴りつけられていた。

中学生達はつけあがり、その後も堂々と店長の前でくわえ煙草をした。

バイト達はやる気のかけらもなかった。

店長が目を離すとすぐにゲームや漫画に没頭し、まるで呼吸をするように不正をした。

注文されていない食材がみるみる減った。

恐らく店長は勘づいていたが、あえて問題にすることもなかった。

バイトをクビにすればあいた穴は自分で埋めなければならないし、管理不行き届きということでまた猿じいにコテンパンにされるに決まっていた。

何よりもうモチベーションがなかったのだろう。

よく業務の最中に「辞めたい」「帰りたい」と呟いていた。

そういう時の店長は決まって無表情だった。

店が潰れる数ヶ月前にようやく店長は辞めた。

退職の挨拶の時、彼は僕たちアルバイトに、これまでで最高の笑顔を見せた。

伯父の水産工場で短期バイトをした。

木枯らしの吹く季節だった。

伯父の車で初めて工場に出勤し、休憩室で他のパート達が出勤するのを待つと、ジャンパーに長靴姿の初老の男女が三々五々集まってきた。

薄暗い部屋の中、石油ストーブを囲んで彼らは談笑した。

もっぱら病気と、介護と、ギャンブルの話題だった。

伯父の両隣に50～60代くらいのが女性が座り、「両手に花じゃの」とからかわれて伯父は照れていた。

彼らの体からは魚の匂いがした。

僕の仕事は凍った魚の餌をカッターナイフで開けていくことだった。

吹き付ける海風が冷たくて、しきりに鼻水を啜った。

分厚い手袋をしていたが、すぐに痺れて手指の感覚がなくなった。

重い箱をもって、何度もマイナス30度の冷凍庫に出入りした。

水揚げされたばかりのサンマの入ったコンテナが大量に運ばれてきた。

魚の詰まったコンテナは光に反射してまるで宝石箱だった。

僕は帽子を被った初老男性とペアを組んで、コンテナからサンマ以外の魚を弾く仕事をした。

ときどき混ざっているアジやらイカやらを床に無造作に捨てていった。

ずっとかがんでいるので、一時間もすると腰が痛くなった。

僕とペア組んでいる初老男性が仕事の手を止め、そそくさとポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけて一服した。

その瞬間、伯父の怒声が響き渡った。

「ワレ、なにしとる」

長靴を鳴らしながら鬼のような形相をした伯父が駈けてきて、僕の目の前で煙草を吸った男性の尻を凄まじい勢いで蹴り上げた。

小柄な男性の体が一瞬浮き上がるほどだった。

男性は尻をおさえて、不明瞭な言葉で弁解した。

伯父はげんこつを握ってさらに威嚇した。

伯父が持ち場に戻った後、男性は作業をしながら、小さな声でずっと伯父の悪態をついていた。

僕はすっかり意気阻喪して水産工場で働くのをやめた。

ファミレスでバイトをした。

ここの社員たちは僕が見てきたなかでももっとも長大な労働時間を誇った。

何もない平日でさえ12時間労働を超えることは珍しくなかった。

ゴールデンウィークや年末年始などの忙しい時期には、拘束時間は15～17時間に達した(朝9時から深夜2時まで)。

もちろんほぼすべてサービス残業だった。

休みは月に2～3回で、バイトが突然休んだり辞めたりすれば、その休みすらも失われた。

休憩時間はほとんど店の休憩室にこもって食事をするか、愚痴や冗談を言うか、うたた寝するかしていた。

そして休憩終了時刻のきっかり5分前になると、

いそいそと代わり映えのしないルーチンワークに戻っていった。

この人たちは何が楽しくて生きているんだろう…と僕は真剣に悩んだ。

テレビも見ない、映画も見ない、小説も雑誌も漫画も読まない、社会の動きや世界の問題にも興味がない、芸術やスポーツを嗜むこともない、知識の獲得や心身の鍛錬に熱心なわけでもない、友人や家族との触れ合いもない…

同じような仕事をし、賄い飯を食べ、家に帰って眠るだけの農家の家畜のような日々。

刑務所の囚人や昔の黒人奴隷でももっと人生の楽しみがあるのではないかと思わせた。

一度、チーフが売上のことで常務だか専務だかに扇子で引っ叩かれていた。

仕事をしていたバイトたちが一斉に振り返るほど大きな音がした。
店長は顔中に汗を浮かべながら太った上司に頭を下げていた。

それを見て僕は、会社員とはもはや人間ではないのだなと思った。
会社という巨大な組織を回すために使い潰される牛馬か部品だった。
チーフは何事もなかったかのようにその日も深夜まで残業をした。

チーフは休憩中、頬杖をついてよく窓の外を見ていた。
窓からは道路が見え、行き交う車が見え、連なる家々が見え、青い山脈と白い雲が見えた。

世界はこんなにも広いのに、店長の一度きりの人生、そのもっとも輝かしい時期は、ほとんどこの狭いファミレスの中で過ぎ去ってしまうのだと思った。

僕の中に人間をやめたくないという強烈な思いが涌き起こってきた。

最後のバイト先は百円ショップのレジうちだった。

ここの社員はだいたい12時間労働が相場というところだった。

店長というものはえてして売上の奴隷だが、ここの店長もご多分に漏れなかった。

毎日の売上に一喜一憂し、二言目には売上、売上と呟き、棚の位置をひとつずらすのでさえ何日も悩んだ。

ちょっとガラの悪い高校生が集団で来たりすると、「おい、万引きっ、万引き気をつけろよ」と僕に耳打ちして、自分も彼らのそばで商品を整理するふりをしながら監視を始めた。

極端に客が少ない日には売上を増やすために、自分でカゴいっぱいにポテチやら飴やらジュースやらを買って帰った(僕はそれを見てドン引きした)。

そんな日は月に何回もあった。

客が怒ればたとえ非がなくても下僕のように平身低頭謝り、本社から役員が来る時は戦々恐々として、額に汗を浮かべながら視察に来た上司におもねっていた。

朝は開店の一時間も前から出勤して事務をし、開店の時間になってからようやく出勤のタイムカードを押した。

運動会前日と言うことで、行楽用品がよく売れる日があった。

店長にも小学生の子供がいることを知っていたので、「運動会、見に行かないんですか」と僕が訊くと、「土日は休めないよ」と店長は当たり前のように答えた。

子供の運動会すら見ることのできない人生があるということを僕は知った。
それを常識のことのように語る人がいるということも。

店長は昔は映画監督になりたいという夢があったらしいが、今は帰宅後にビールを飲むのが何よりの楽しみらしかった。

僕は就職活動をまったくしなくなった。

心底恐怖に震えていた。

なぜこんなシステムがまかりとおっているのか、ワケを知りたかった。

就職とは自殺と同義だと思った。

システムの隅っこにあいた風穴

時給７００円のレジ打ちの日々を送っていたある日、店長が僕に、将来総合的なリサイクルショップを開いてみたいというような話をした。

閉店間際のヒマな時間帯だった。

むろん店長にはそんな金も時間もできる見込みはなかったので、明確な意志としてではなく、漠然とした夢物語として語ったのだと思う。

僕が本好きだということは店長も知っていたので、「君は書籍の仕入担当をやらないか？」と言われた。

僕にとって就職とは死ぬことだったが、書籍を仕入れるという行為は純粋に面白そうだなと思った。

「そもそも古本というものはどこから仕入れるのだろう？」

疑問が浮かび、帰宅してからネットで調べてみた。

そこで僕は「せどり」という言葉と初めて遭遇した。

このたった3文字の言葉が僕の人生を変えた。

ブックオフに足を運び、棚にある商品のネット上の相場を携帯ツールで調べ、利益が出そうなものだけ買って帰って転売する…。

ビジネス経験などまったくなくても、これくらいならできるんじゃないかと感じた。

せどりで生活している人のブログをいくつか読んだが、みんな簡単そうにお金を稼いでいた。

初期資金は数万円くらいならどうにか用意できた。

さっそくある日のバイト帰り、職場の近くにあったブックオフに立ち寄ってみた。

田舎の小さな店舗だが、棚には色とりどりの本がぎっしり詰まっていた。
期待は膨らんでいたが、疑う心もあった。
うまい話には裏がある…そんな警告をこれまで生きてきた中で何度となく聞かされていた。

店員や他の客の目線を気にしながら、
携帯に書籍のＩＳＢＮ番号を指で打ち込んでいった。
表示される相場は「１円」が多かった。
当たり前だが、何でもかんでも利益が出るわけではなかった。

が、10冊ほど調べたとき、突然、Ａｍａｚｏｎ価格１０００円を超える数字が携帯に表示された。

僕は何度も本のタイトルと価格を見返したと思う。

時間にして5分も経っていなかった。

Ａｍａｚｏｎ価格１０００円超えのそれは、確かに目の前の１０５円コーナーに挟まっていた。

胸が少し高鳴った。

１０００円というお金を稼ぐために、僕は一時間以上もレジの前に突っ立って、赤の他人達に頭を下げなければならなかった。

あるいは皿洗いなら、軽く数百枚の皿を汗だくになりながら洗わなければならなかった。

それだけのお金が、目の前の棚に無造作に挟まっている・・・。

それから1時間ほどの間に５００円～１０００円くらいの利益が出る本をさらに数冊見つけた。

それらをすべてレジに持っていくと、僕と同じく時給７００円や８００円円で働いているであろうアルバイトが、笑顔で黒い袋に詰めてくれた。

売れるかどうか確信はなかったが、損をしても数百円なので気は楽だった。

帰宅してすぐにＡｍａｚｏｎのアカウントを開設し、買ったばかりの本を出品した。

見慣れたＡｍａｚｏｎのサイトに自分の本が並んだ。

翌日は普通にバイトをした。

８時間みっちりレジ打ちをした後、休憩室の椅子に座って携帯を開くと、見慣れないメールがＡｍａｚｏｎから届いていた。

１０５円で仕入れた本が、1500円ほどで売れていた。

僕はすぐに立ち上がってその場をウロウロしはじめた。

それは僕の2時間分の労働の対価とほぼ同じだった。

売れた本をお客さんに発送しなければ、と思いたった。

幸い僕の職場は百円ショップだったので、その場で封筒やテープなどの資材を買って帰った。

ホームページを参考にしながら、慣れない手つきで買ったばかりの本を梱包し、クロネコヤマトからお客さんの住所に発送した。

それでおわりだった。

ブックオフからＡｍａｚｏｎ、そしてお客さんのもとへと、本を移動させただけでお金が生まれた。

その日から足繁くブックオフに通った。

毎日バイトが終わると、２～３時間ブックオフで利益の出る本を探した。

ときには20冊以上仕入れられる日もあった。

３０００円くらい利益が出る本が売れたときは有頂天だった。

３００００円あれば学食で朝昼晩好きなものが食べられた。

牛丼屋やラーメン屋でトッピングだってできた。
欲しかったＣＤや本を新品で買えた。
友達とカラオケに行けた。
映画だって２回も見れた。

バイト帰りにブックオフに立ち寄るだけで、そのような大規模な生活の転換をもたらすお金が稼げるということ…

これは僕の信じてきた価値観を根底から揺るがす事態だった。
お金とは誰かに雇われないと得られないものだと思っていた。

僕は古本屋を始めたのだと思い、さらに熱中してせどりをした。

色々と効率的な方法というものも研究した。

すると大変なことが起きた。

せどりからの収入が、バイトの給料を上回り始めたのだ。

丸1日立ちっぱなしで働いて、勤務終了後にくたくたになって椅子に座り込み、携帯を開いてみたら、よくバイトの給料を圧倒的に上回る1万や2万の利益が発生していた。

嬉しいを通り越して呆然とした。

世の中に常識としてまかり通っている価値観に対して様々な疑惑が生まれた。

働くとは何か？

お金とは何か？

なぜこんなに必死に働いて５０００円や６０００円しか稼げず、片手間のせどりで１万も２万も稼げるのか？

バイトの給料と合わせると、同世代のサラリーマンの収入を軽く超えていた。

店長に注意を受けたり、仕事を教えてもらったりしているとき、ふと、俺の収入はこの人より多いのだな、とビックリすることがあった。

10年近く仕事に従事し、趣味や夢を捨て、会社に人生の大部分を捧げてきた人の収入を、ただの学生が3ヶ月ほどで超えた。

…もしかして本当に雇われなくても生きていけるのか？

足元がぐらぐらと揺らぐようだった

完全無欠と思われたシステムの片隅に、ぽっかりと風穴が空いているのを僕は見つけた。

僕はアフィリエイトで生きていこうと思った

大学の同級生たちは大部分がすでに内定をもらい、佳境に入った卒論の執筆に躍起になっていた。

早々に卒論を書き終え、単位も取り終えた学生は、もう人生をあがったかのような弛緩した表情でぬるま湯の日々を送っていた。

僕はバイトで貯めた学費を両親にパチンコで使い込まれて休学した。

仕方ないのでひたすらバイトをしつつ、覚えたてのせどりに精を出していた。

毎日ふらりとやってきてはカゴ一杯に買っていく僕の顔を、ブックオフ店員が怪訝な顔で見ていた。

家の本棚がみるみる薄汚れた中古本で埋まった。

毎日何通もの売上発生メールが僕の携帯を鳴らした。

母親と一緒にせっせと売れた本を梱包し、クロネコヤマトに持っていった。

せどりの収入を時給換算すると２０００円～３０００円くらいだった。

給料をあわせると月収30万円くらいにはなった。

相変わらず借金督促の電話は鳴り響いていたし、両親は毎日１円パチンコをしていたが、どうにか生活費と利息分くらいは支払えたので、最低限の生活を維持することはできた。

両親は僕に就職しろとは言わなくなった。

すでに家の生活は半分以上僕が支えていた。

僕にせどりをやめられると彼らも困るのだった。

僕は両親を借金から救い出すために、また僕自身が自由を手に入れるために、せっせとブックオフに通った。

ところがすぐに収入は頭打ちになった。

田舎なので仕入れ先が少なかったことが最大の原因だ。

利益がとれる商品は無限ではないから、一度仕入れてしまったら、新たに入荷されるまで待たねばならなかった。

僕としても、せどりだけで一生食べていけるとは思っていなかった。

たまたま抜け穴を見つけただけだと思っていたので、5年先、10年先も同じことをして食べていけるかどうかは確信がなかった。

僕はできれば、ネットビジネスだけで一生食べていきたかった。

僕にとっては一時的に儲けるということよりも、長く、安定して生活費を稼げることのほうがはるかに重要だった。

それに自分で働く時間を管理できるのでストレスは少なかったが、毎日足を棒にして何時間も店内を歩き回る生活は、決して自由とは呼べなかった。

少し仕入れるのをサボったら途端に売上が減った。

お金のために一生ブックオフをウロウロする人生はまっぴらごめんだった。

打開策を探してネットサーフィンをする日が続いた。

そんなとき、ふと、アフィリエイトをやっているある個人のページにたどり着いた。

その人は若くしてたっぷりの自由を満喫しながら、ときどき旅行先でブログやメルマガで記事を書くだけで、月収数百万円というような途方もないお金を稼いでいた。

読者数が増えて影響力を持つと、そんなことも可能になるらしかった。

その姿はあまりにも眩しすぎて、僕の眼はあっさりとつぶれた。

かすかに残っていた就職に対する義務感も根元からポッキリ折れた。

そうだ、僕はアフィリエイトで生きていこうと思った。

ネットビジネスに集中するため、就職活動が忙しいからと嘘をついてアルバイトをやめた。

退職の日、店長がサプライズで上等なネクタイをプレゼントしてくれた。

「就職活動頑張って！」

ありがとうございます、と言いながら、僕はなんとなくバツの悪い気分を味わった。

そのネクタイは一度も僕の首に巻かれることがないまま、今も実家のタンスの中にしまってある。

退職後は、日中はせどり、夜はアフィリエイトと、ネットビジネスの作業・勉強に没頭した。

サラリーマンも目じゃないくらい働いた。

なけなしのお金を惜しみなく教材などに投資した。

その頃犬を飼いはじめていた。

野良犬が父の仕事場で子を産んだのだ。

特に可愛い奴を父が一匹捕まえて持って帰ってきた。

母親や兄妹と引き離されてかわいそうだったが、その人なつこさに僕もしばらく夢中になった。

ジョンという名前を付けて可愛がっていたら、後にメスだと発覚した。

餌やら菓子やらを欲しがるままに与えていたらむくむく成長した。

作業に疲れたら、ｉＰｏｄに入れたビジネスの音声教材を聞きながら、虫の音のうるさい星明かりの田んぼ道を夜な夜なジョンとランニングした。

せめて30歳までにはアフィリエイトで自由になるのだと決めていた。

理解者はいないと思っていたから、誰にも決意は話さなかった。

まさかその４ヶ月後に月収１００万円を超えるとは、僕も想像だにしていなかったが…

100万円という札束

生まれて初めて１００万円という札束を握ったときの感動は、とても一言で言い表せるようなものじゃない。

ただの１００万円じゃない。

喉から手が出るほどお金が欲しい状況で、何もなかった学生が、誰にも雇われず、イチから自分の力だけで稼ぎ出した１００万円だ。

僕はその分厚さを何度も試し、写真を撮り、自分のボロボロの財布に無理にしまってみたりして、札束の感触を十分堪能してから、その金を両親に渡した。

札束は借金の返済のため、その日のうちに消費者金融のＡＴＭに吸い込まれた。
10年近く両親を苦しめた消費者金融のひとつを完済した。

その調子で、毎月お金が入る毎に、札束をＡＴＭや店頭へ運んだ。
無限とも思われた借金が凄まじいスピードで減っていった。
返済すると消費者金融がまた「金を借りないか？」と電話してきたが、さすがの父も懲りたらしく、すぐに断って電話を切った。

パソコンもインターネットもまったく無縁の母は、僕が悪いことをしているんじゃないかと気が気ではないようだった。

僕は何度も自分のやっているネットビジネスが犯罪ではないことを説明しなければならなかった。

緊急性の高い借金を返し終わっても、まだ10年近く溜めに溜めた各種税金の滞納があった。

こちらも数百万円は軽くあった。

よくこんなに溜め込んだものだと僕はぶつぶつ両親に文句を言いながら、仕方なしにそちらも肩代わりした。

実際、思いのほか短期間で稼いでしまった金なので、そこまで執着もなかった。

僕自身まだ実感があまりなかったのだと思う。

皿洗いで稼いだ数万円を渡すときの方がよほど断腸の思いだった。

結局目立った借金・滞納を払い終わるまでに、約１年かかった。

督促の電話や金にまつわる喧嘩が絶えなかった我が家に、ようやく平穏な食卓が訪れた。

「私らの子がどえらいもんに育った」と母がニコニコしていた。

「子はかすがい、子はかすがい」と父がしきりに呟いていた。

僕も悪い気はしなかった。

両親は今でも暇つぶしにパチンコをするが、せいぜい１円パチンコで遊ぶ程度のもので、昔のように無茶な負けをしてくることはなくなった。

借金を返さなければならないというプレッシャーがなくなったからだと思う。

僕が東京に引っ越すと両親がしきりに帰ってこいと電話してくるので、２ヶ月に１回くらいは帰省することにしている。

今両親は僕の仕送りで食べている。

父の趣味がテレビなので、チャンネル数が１００近くになる有料サービスに申し込んであげたのだが、帰省するとよく夫婦が取っ組み合いのチャンネル争いをしている。

資本主義のてっぺんらへん

ネットビジネスはパソコン一台あればできる仕事だから、ネット環境さえ繋がっていれば、住む場所はどこでも自由だ。

僕は一度東京というところに住んでみたかった。

20年間山陰の田舎からほとんど出たことがなかった僕にとって、東京はテレビや映画の中にだけでてくるおとぎの国だった。

生まれて初めて東京に出たときの衝撃はいまだに脳裏に焼き付いている。

数分おきにやってくる電車も、

消えることのない人身事故の表示も、
見上げるだけで首が痛くなるビル群も、
Suicaをかざせば落っこちてくるジュースも、
サラリーマンたちのロケットのような歩行スピードも、
街中にあふれる商品の多様さも、
お祭りのような人口密度も、
公園でゴロゴロしている浮浪者たちも、
何もかもが驚異だった。

僕は最初、ただ呆然として高層ビル群を眺め、ついで高揚し、好奇心の赴くままに都会の新しさの中を駆け巡り、新宿駅で当然のように迷子になった。

地元に戻った後も興奮はなかなか醒めなかった。

４階建て以上の建物がほぼ存在しない田舎で、僕が両親・飼い犬と土臭い閉じた生活を送っている間、東京人は毎日あんな遊園地みたいな場所で、お洒落で優雅で文明的な日々を謳歌しているのか…？

なんだか知らないうちに楽しいパーティが開かれていて、自分だけ誘われていないのを知ったかのような淋しさがあった。

それ以来僕はすっかり田舎コンプレックスになり、自由に住む場所を選んでいいとなれば、もう東京以外の選択肢が全然浮かばない状態だった。

お金と時間を手に入れてからは、しょっちゅう東京へ遊びにいった。

そのころ東京の知り合いの起業家に、六本木ヒルズ最上階で開かれるというとあるパーティに誘われた。

僕は面白そうだから行きますと言いながら、『六本木ヒルズとはいったい何だろう、何か建物の名前らしいが？』などと内心首をかしげていた。

当日、同じパーティに誘われた人たちと合流し、迎えの車に乗って、一際大きくてキラキラ眩しいビルの前で下車した。

どうやら六本木ヒルズとは、社長や芸能人などの金持ちがたくさん住んでいる建物らしかった。

映画館やら美術館やらが隣にあるなんて贅沢だなぁと思った。

警備員の立つ入口をくぐり、エレベーターに乗って最上階の吹き抜けのパーティルームに入った。

すでにたくさんの参加者が集まっていて、めいめい料理をつついたり、グラスを持ったまま会話をしたりしていた。

一面ガラスの粉をぶちまけたような夜景が眩しかった。

僕はいつもの地味で平凡な服装だったが、大半の人たちはスーツやドレスなどのフォーマルな格好をし、腕時計をキラキラさせたり、イヤリングやネックレスをブラブラさせたりしていた。

メルマガなどで名前を聞いたことがある業界の有名人もたくさんいた。

20代くらいの若い人も多かった。

何をどうしたらいいか分からず僕がまごついていると、自称ギャル男だという、ホストみたいな恰好と髪型をした男が気さくに話しかけてきた。

ちょっと話を聞いてみたら年商10億円くらいの社長だった。

僕はいきなりラスボスに襲われた気分で、挨拶もそこそこに退散した。

当時僕はまだ学生だったし、たった一人でビジネスをしてきたので、ビジネスマナーなど何も知らず、名刺も持っていなかった(今も名刺は面倒なので持ち歩かないが)。

さらに生来人見知りの性格だったので、群れを成す社長たちに自分から話しかける勇気も出ず、隅っこの開いている席を見つけて、ちびちびとお酒を飲んだり、料理をつまんだりしていた。

「次回のプロモーションには５０００万円くらいの広告費をかける予定だ」

「どこどこの株が買い時」
「バリのプール付き別荘が安い」
「あそこにいる秘書は社長の愛人だから」
「経営者しか相手にしない霊媒師が沖縄にいて、癌すら直せるらしい」

耳をそばだてていると、色んな会話が耳に入ってきた。
みんな楽しそうにお金とかビジネスの話をしていた。

周囲にいる人々と夜景を交互に見ながら、これが資本主義のてっぺんらへんかぁ、と思った。

１年前まで時給７２０円で皿洗いやレジ打ちをし、この身の自由ばかりを夢見て走ってきた僕にとっては、なんだか色々と過剰だった。

パーティが終わって帰宅する途中、六本木ヒルズに住んだり、事務所を構えたりすることが、起業家にとって一種のステータスになるのだと同行者に聞いた。

なるほど、あの建物は資本主義社会で成功を夢見る人々にとっての神殿のようなものなのだと僕は理解した。

ああやって夜な夜な、日本中からお金をもった人たちが首都の夜景を見下ろすために集まってくる。

なんだか光に群がる蛾みたいだなと思った。

香港旅行中にサラリーマンの年収分稼ぐ

田舎での生活の無為と孤独に耐えかね、両親を説得してついに東京に移住した。

同じ起業家の友人たちと共同で下北沢に事務所を借りた。

事務所を構えるというのはなかなか楽しい経験で、建物を探したり、家具を搬入したりしている間、僕は子供の頃に作った秘密基地のことを思い出していた。

やたらと高い塀に周囲を囲われた、刑務所か要塞のようなマンションの一室を借りた。

近辺は高級住宅街らしく、あちこちにベンツやらBMWやらが止まっていた。

友人たちもインターネットで起業して稼いでいたから、僕に負けず劣らず自由人だった。

僕たちは仕事そっちのけで事務所を遊び場に改造した。

プロジェクターを導入し、友人たちを呼んで大画面で映画を1日5本見たり、Wiiのマリオカートをやったり、サッカー観戦をしたりした。

パソコン一台あればできる仕事なので、必ずしも事務所に行く必要はなかったけれども、楽しかったので毎日のように事務所に顔を出した。

下北沢は飲食店が豊富なので、夜になれば友人たちと美味しいものを食べ歩いた。

長い田舎暮らしで貧弱だった僕の舌はたちまち肥え、僕のiPhoneは人気グルメブログを運営できそうなくらい美味しそうな料理の写真で埋まった。

世の中にはうまいものがたくさんあるのだなと思った。

引っ越してから数ヶ月経った頃、事務所のメンバーで海外旅行しようという案が出た。

ちょうど新商品の発売を控えているメンバーがいたので、どうせなら海外旅行しながら旅費を稼いでしまおうと盛り上がり、僕も便乗して海外から新商品をアフィリエイトしてみることにした。

行き先はインターネットが安定していそうな近場ということで、香港に決まった。

朝7時15分に成田空港に集合。

前日に成田空港の近くのホテルを予約していたが、電車に乗り遅れ、途中の駅のネットカフェで一泊した。

ネットカフェのパソコンで新商品を案内する記事を1時間ほどかけて書き、メルマガの送信ボタンを押した。

そのあと漫画を1～2冊読んですぐに寝た。

朝起きて携帯を見たら、売上発生を知らせるメールが怒涛のように届いていて、数時間で50万円くらい売上が発生していた。

海外旅行中に旅費を稼ぐ企画のはずが、出発前に旅費を回収してしまい、とんだ企画倒れだと僕は思った。

友人たちにも苦笑された。

仕方ないので海外旅行中にどこまで売上を伸ばせるかという企画に変更した。

といっても主目的は旅行を楽しむことだから、日中は一切仕事らしいことは全然しなかった。

オープントップバスに乗って香港の街並みをドライブしたり…
繁華街で剣を呑み込む坊主のパフォーマンスを見守ったり…
海上クルーズで夜景を見ながら食事や音楽を楽しんだり…
ガラクタばかり売っている市場を練り歩いたり…
世界で４番目に高いビルの展望台に登ったり…
香港ディズニーランドで中国人たちの猛烈な列の割り込みに圧倒されたり…

夜ホテルに帰って、寝る前に友人と少し仕事をした。
インターネットは問題なく使えたので、友人の商品販売もスムーズだった。

僕の携帯は昼夜問わず商品が売れたことを知らせるメールでぶんぶん震え、僕も頻繁にチェックするのですぐ電池が切れてしまった。

気が大きくなって友人たちに高級中華を振る舞った。握りこぶしくらいある牡蠣を食べたり、鳥の足入りの気持ち悪いスープを飲んだりした。

あっという間の３泊４日だった。

帰国後、友人たちと新宿のカフェに入って売上を計算した。

３泊４日で４５８万円の利益だった。

海外旅行しながら、ホテルから記事を数通書いただけで、世のサラリーマンの年収分くらい稼いでしまった。

ああ、海外でも余裕で生きていけるなと思った。
友人も商品がたくさん売れて喜んでいた。

海外から帰国したからといって、翌日からの予定も特になかった。
旅行の疲れを癒すためにしばらくゴロゴロしていた。

僕はいよいよ妙な世界へ足を踏み入れてしまったと思った。
こんな生き方は、両親にも、サラリーマンをやっている友人たちにも、絶対に理解されないだろう。
しかし、僕は多分、それまでの人生で一番楽しい日々だと感じていた。

手に入れた自由な人生

お金や時間に縛られることのない生活を手に入れてから、すでに5年以上が経過した。

年を重ねるごとに働く時間は少なくなっていった。

日々発生する売上額にもやがて興味をなくし、細かくチェックすることもやめたが、この文章を書くにあたって数年分の決算報告書を見てみたら、3億円近い売上が発生していた。

社員を雇わないし、原価もかからないので、「異常な利益率だ」と税理士はいつも唖然とする。

自由を手に入れてからしばらく、僕は孤独を感じることが多かった。

そもそも僕の生き方は、起業・ビジネスの世界においても特殊らしい。

使命感や成功への熱望からがむしゃらに働き、会社を大きくすることばかりを夢見る社長が多い中、僕はただ僕の自由を確固たるものにするために活動してきた。

当然上昇志向のギラギラした社長たちとは話が合わなかった。

サラリーマンをしている人たちから見ても僕は異常だ。

雇われて働く以外の生き方を想像したこともない人たちからすれば、ろくに働きもしないのにお金を稼ぎ、時間にも場所にも縛られず不規則に生きる僕は、恐らく宇宙人のように不可解な存在だろう。

ちょうど僕が皿洗いのアルバイトをしていた頃、起業家という人種が宇宙人にしか見えなかったのと同じように。

親から大きな資産を受け継いだりして、生まれつきお金持ちな人たちともやはり住む世界が違うと感じることが多い。

僕はどこまでいっても成金に過ぎない。

子供の頃、特別な日に親に回転鮨に連れて行ってもらい、そこで禁止されていた３００円もする皿に手を伸ばそうとして父にビンタを食らった。

そういう家庭で二十数年もの時を過ごしてきた。

孤独感を解消するために、僕は都会に住む場所を変え、積極的に人と会うようにした。

情報発信をしていると、僕のように個人で稼いで自由に生きている人たちもそれなりの数存在することが分かった。

自由人たちのコミュニティのようなものも小さいながらあった。

僕に影響されて起業の世界に飛び込み、成功して自由を手に入れた人も多い。

そういう人たちとも何人か友達になった。

僕をあっさり飛び越えて、メディアなどにも出演し、ビジネスの世界で大きく活躍している人もいる。

僕は徐々に孤独ではなくなっていった。

なぜ僕はこんなに短期間で自由になれたのだろう、と考えることがある。

僕のもともとの目的は、せいぜい親の借金を完済し、月数十万程度自分で稼いで趣味中心の生活を送ることだった。

そのために情報発信などもして影響力を手に入れようとしたが、事態は僕の予想を上回るスピードで急変した。

今やほしいものはたいてい値札を見ずに買えるし、仕事を忘れて何ヶ月でも旅行できるようになった。

一部のサラリーマンたちが定年後にようやく手に入れられるものを、僕は20代半ばにして手に入れてしまった。

僕は人よりずば抜けた才能があったわけではないと思う。

学生時代も、起業してからも、明らかに僕より頭がいい人はいくらでもいた。

資金、人脈などの面でも、僕は人より圧倒的に劣っていた。

それでも僕が自由になれたということは、自由とは案外、望めば誰でも手に入ってしまうものなのかもしれない。

たいていの人は、それが無理なことだと勝手に決めつけて、自分から不自由な生活に飛び込んでいってしまうだけで。

実際、「自由になるなんて無理」と言う人は、ほとんどの場合、本気で自由を目指したことがない人ばかりだ。

試しもせずに想像だけでしゃべっている。

僕はもともと文章を書くことは好きだから、無理に働く必要がなくなってからも、考えたことや経験したことなどをよく発信している。

すると、昔の僕のように、自由を手に入れたいと願っている人たちから、たくさんのメッセージをいただく。

たまに講演などをすると、たちまち僕の話を聞きに百名以上の人が全国から集まってくれる。

僕より二倍以上も年を食ったおじさんとか、社員を何人も雇っているような社長とかが、僕に名刺を渡すために目を輝かせながら列を作ったりしているのを見ると、本当にそれだけの価値が僕にあるのだろうかとプレッシャーを感じることもある。

何もない個人が今から自由になることは決して不可能なことではない。

インターネットは個人が影響力を持つことを可能にした。

会社の力は相対的に弱まって、誰にも雇われず、自分の力で稼ぐ人たちの数がこれからどんどん増えていく。

これは未来予測の学者たちが口を揃えて言っていることだ。

僕のような生き方をする個人が現れたのも、現代的な現象だと思う。

行動し始めるのは今からでもまったく遅くない。

むしろ早すぎるくらいだ。

長い人類の歴史の中で、インターネットが普及しはじめたのはせいぜいここ十数年ほどでしかない。

試しに周りを見渡してみると、会社を離れて自分の力だけで稼ぐなんて、たとえ良い大学を卒業していても、想像すらしたこともない人たちばかりだ。

みんな良い給料をもらえる会社に就職したり、頑張って働いて給料をアップしてもらったりすることにしか関心がない。

自由に向けて行動し始めるだけで、そういう人たちに簡単に差を付けることが可能になるはずだ。

自由になって、自分の思い通りの人生を生きられる人が１人でも増えるよう、僕は今後も情報発信していこうと思う。

もちろん僕が忙しくなってしまっては本末転倒なので、そのペースはひどくゆっくりしたものになるだろうが。

気長にお付き合いしていただけると嬉しい。

電子書籍無料キャンペーン！

お金・時間・場所　あらゆる束縛がなくなる

『自由な人生を手に入れる教科書』

なぜサラリーマンは、毎日馬車馬のように働いても、永久に自由にも豊かにもなれないのか？
他方で、なぜ学生や主婦といった普通の人たちが、たった数年で圧倒的な経済的・時間的自由を手に入れられるのか？
パソコン一台で累計３億円を稼ぎ、20代にしてセミリタイアに成功した著者が、お金にも時間にも縛られない、自由な人生を手にいれる方法、考え方を公開。
インターネットが普及した現代だからこそ可能な、雇われない生き方のすすめ。

著:濱田大輔

無料ダウンロードは以下 URL をクリック

http://afr9.net/cs2/densi1/

【著者】だいぽん

株式会社ＧＲＡＳＰ代表。パチンコ狂の両親を持ち、借金まみれの極貧の家庭で育つ。皿洗いやレジ打ちなど、忙しいアルバイト生活を送る中で、自由を手に入れたいという欲求が抑えがたくなり、就職活動を放棄。在学中にお金・知識・人脈ゼロの状態でインターネットビジネスで起業。たった１人で５年間で累計約３億円を売り上げる。現在は働く必要がなくなり、20代にしてセミリタイア。音楽学校に通ったり、創作活動に打ち込んだり、旅行したりと、趣味中心の生活を送りながら、個人が自由を手に入れるための考え方を発信している。

ブログ：http://daipon01.com/

メルマガ：http://afr9.net/so/16.php

ツイッター：https://twitter.com/daipon01

フェイスブック：https://www.facebook.com/daipon01

ＬＩＮＥ@ＩＤ：　@ｄａｉｐｏｎ(@を含む)